2. 小田川が結ぶ小田林業と山とともにある営みにみる歴史的風致

□はじめに

内子町の林業は、江戸・藩政期にさかのぼる。大洲藩主加藤氏が肱川流域において治山治水のためのスギ、ヒノキ、薪炭材のクヌギなどの植栽・造林を奨励した。小田地区においては、カエデ、ブナ、ツガなど、林産資源の豊富であった小田深山からの搬出も盛んに行われた。

その後、林業は戦後の木材ブームにより隆盛を極め、伐採と植林が盛んに行われてきた。特に小田地区ではスギの植林が盛んに行われ、森林組合が中心となって京都の北山や奈良の吉野に職人を派遣し技術を習得させた。近年、林業は衰退したが、技が受け継がれ、当時植えられた木が財産として蓄積され、現在、新たな仕組みの下、山の再生・林業の再興が始まっている。

昭和 16 年頃の木材搬出風景

都築酒店店舗及び主屋

内子町の林業においては小田川の存在が大きく、藩政期の頃から伐り出された木材を筏に組み、「筏流し」で大洲・長浜の本流肱川の河口まで運んでいた。筏流しは昭和 28 年 (1953) まで行われ、その後平成 5 年（1993）に川登地区の川まつりとして地域住民の手で再開され、その技術を受け継いでいる。明治後期から昭和初期には小田川沿いに製材所が多数創業し、地域内の流通の一端を担った。

長い歴史の間には、地元神社や住宅などに小田深山の材などが使われ、現在にもその山師や大工の仕事を見ることができる。また山とともに生きる小田地区においては、山の神火祭りや巨樹・巨木の保存など、山に関する営みも残る。

1　関連する建造物

(1) 林業に関する建造物

①民家・商家・神社

イ．都築酒店店舗及び主屋

小田中央商店街に位置する。平成 27 年 (2015)『内子町誌うちこ時草紙 I「文化編」』によると、初代当主都築九平により明治 20 年 (1887) に建てられ、街路に面して建ち、格子戸の建具や軒受けもよく残っている。2 階街路側の半分に手摺を設けて開放的な造りとし、2 階高を高くとるなど、明治期の店舗兼住宅の好例となる建物とされる。大黒柱や梁に小田深山材などマツ材が多く使われている。平成 15 年 (2003)、登録有形文化財に登録。

ロ．旧二宮製材所事務所兼主屋

昭和 17 年 (1942) に町内の大工・上田春吉・静哉親子によって建てられた。二宮家は二宮木材株式会社として昭和の終わりころまで小田地区の材木業を担った会社である。主屋の裏側一帯が工場で、かなりな量を扱っていた。それもあって、小田深山のケヤキ、マツ材などの良材が使われた重厚な造りとなっている。

旧二宮製材所事務所兼主屋

ハ．旧土居家住宅

小田地区日野川の庄屋だった土居家が昭和初期頃から住み、長く書店を営んだ。主屋は木造地上 2 階、地下 1 階、桁行 6 間、梁間 8 間の入母屋造。奥に蔵が 2 棟ある。主屋の上棟は大正 14 年 (1925) で、屋根裏に残されている上棟時に使われた破魔矢に記されている。廊下の板材には幅広のケヤキが使われている。

旧土居家住宅

ニ．とぼしが森三島神社

永禄 11 年 (1568)、曽根城主、曽根宣高が大三島の大山祇神社から大山積命、高靇神、雷公神を勧請して創立。明治 8 年 (1875) に郷社に列格された。当時の広瀬郷大瀬村他 8 カ村の総鎮守。現在の社殿は、平成 2 年 (1990)『内子の神社・仏閣』によると、明治 33 年 (1900)、宮司であった大本惣右衛門の父で棟梁の新五郎によって改築された。本殿及び拝殿は平成 8 年 (1996) に町の有形文化財に指定。脇障子には長州大工の銘もある。昭和 11 年 (1936)『郷土誌大瀬村』によると小田深山材が使われた。

とぼしが森三島神社

②製材所・材木店

製材所や木材店は、明治後期に見られはじめ、昭和期に入り木材ブームによって創業が増えた。流通形態は時代時代で変遷を遂げた

大瀬木材有限会社の工場

有限会社森田材木店

が、小田川流域の恵まれた輸送環境により小田川沿いに建設された製材所等が多かった。

林業の衰退とともに減少したものの、町内には今も製材所や材木店、素材生産事業者等が10社あまり操業し、特に大瀬木材有限会社と有限会社森田材木店は長く続き、現在の林業を支えている。

イ．大瀬木材有限会社の工場

大瀬木材有限会社は昭和22年(1947)に大瀬地区に創業。木材ブーム真っただ中の昭和29年(1954)に稼働していた製材所として、平成4年(1992)『内子町産業経済誌』にも名を連ねている。昭和30年代後半に現在地の小田川沿いに工場を構えた。昭和41年(1966)の国土地理院の空中写真からも一部ではあるが、当時の工場が現在も使われていることがわかる。

ロ．有限会社森田材木店

木材流通の拠点であった旧内子駅前にある木材店。倉庫の一部は大正頃に当時の松本製材が建てたもので、梁は6間(約11m)ほどもあるスギ材で、現在では考えられないくらい長い材が使われている。昭和37年(1962)以前に撮られた写真にも写っており、その後、近隣地で操業していた有限会社森田材木店が昭和45年（1970）頃にその建物を引き継ぎ現在に至る。

(2) 山の営みに関する建造物

小田地区では山に関係する信仰などの営みが長く続いており、特に寺村地区の「山の神　火祭り」は約2百年続いている。また小田深山にも林業の盛んであった頃の名残りで、林業関係者によって神社などが祀られている。さらに小田地区及び周辺集落の神社には、推定樹齢1,000年を超えるとされる巨木が神社境内をはじめ、地区の各所に存在する。宮総代や地域住民の手により地域のシンボルとして継承されている。

①六角山の石碑

寺村地区には8月15日には山の神に火を献じて神を迎え、山の恵みと秋の豊作を祈って灯される「山の神火祭り」が行われている。その「山の神」は、六角山山頂に石碑が祀られている。刻まれている文字は風

六角山の石碑

化して読めないが、火祭りのお世話をする当番が記録する『当番帳』に江戸時代からの記録があり、この六角山へのお参りのことも書かれているため、当時からここにあったと考えられる。

②小田・町村地区の愛宕山など社、石碑

小田地区をはじめ、町内には火の神様を祀る愛宕山や木を運んだ馬の供養のための馬頭観音、山の神を祀る祠などが各所に見受けられる。

小田・町村地区でも愛宕山（愛宕神社とも呼ぶ）を祀っており、文化 10 年 (1813) の銘の石灯籠からも古くからあることが分かる。社のすぐ横には平成 9 年 (1997) に町の天然記念物に指定された「愛宕の大ヒノキ」もそびえている。

他、寺村地区でも愛宕山が古くから信仰されており、地区内の山を登ったところに石でつくられた祠がある。小田深山には総山祇神社や鬼ヶ臼観音が祀られており、社や観音像は平成に入ってから新しくされたが、成り立ちは古く、年代は定かではないが、神社の石段や鳥居は昔からのものが残っている。

③広瀬神社

延長 4 年 (926) に土佐の人士によって現在地に祀られたとされる。建長 2 年 (1250) に大田民部太夫と大野伊勢守が土佐軍と大野ヶ原で対陣、小田深山妙見ケ森で産土神に戦勝祈願をしたところ勝利し、この里を妙見ケ森と改め神号も妙見宮と改称した。主祭神は天御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神。小田郷 15 カ村の大氏神として大洲藩主の祈願所の一社となり、蛇の目の紋章を拝領し、後に広瀬神社と改めた。寛政 2 年 (1790)、嘉永 4 年 (1851)、安政 4 年 (1856) の棟札があり、社殿は江戸後期の建築とされる。

町村の愛宕山

愛宕の大ヒノキ

広瀬神社

広瀬神社の相殿の恵比須神社

イチイガシ

ケヤキ

中川三島神社

太森神社

相殿として、恵比寿神社（大国主命（おおくにぬしのみこと）・事代主命（ことしろぬしのみこと））が祀られている。平成 27 年 (2015)『内子町誌うちこ時草紙 I「文化編」』によると本殿の彫刻は長州大工門井友祐の作と考えられ、長州大工による彫刻は江戸から明治期にかけてつくられていたため、当神社もその頃の建築と考えられる。

境内には樹齢 1,000 年以上といわれるイチイガシ（県指定天然記念物、昭和 25 年 (1950)）とケヤキ 2 本（同、同 28 年 (1953)）の巨樹がそびえ、地域のシンボルとなっている。

両神社とも昭和 32 年 (1957) の『館報おだまち』に連載された「郷土の生立」において巨樹らと併せて紹介されており、古くからまちの成り立ちに関わり、地域のよりどころとなっていたことがわかる。

④中川三島神社

小田地区祝谷のふもとにある小田地区で最古となるお宮。記録によると、和銅 5 年 (712) に、大三島より山の神である大山祇神（おおやまづみのかみ）、高靇神（たかおのかみ）、雷大神（いかづちのおおかみ）の 3 つの神を勧請して、一宮大明神との称号をもらってお祭りしたのがはじまりといわれている。度々焼失し、昭和 57 年 (1982)『小田町の文化財』によると現在の社殿は昭和 11 年 (1936) に 8 年の年月と氏子の努力により再建された。材は小田深山において大工の一人、後藤氏が木取りを行ったとされ、ヒノキ、ケヤキなどの天然木が使用された。境内には大三島より勧請されたときに記念に植えられたとされる乳出の大イチョウ (県指定天然記念物、昭和 24 年 (1949)) をはじめ、兄弟カヤ（町指定天然記念物、平成 9 年 (1997)）の巨樹がそびえている。

⑤太森神社

小田上川地区の氏神で、祭神は伊弉諾命（いざなぎのみこと）、饒速日命（にぎはやひのみこと）。興国 2 年（1341）に西南の宮満良（みやみつよし）親王がこの地の山中に逃れたとき、大和国吉野の金峰山より安閑天皇の御分霊を御獄（みたき）の古戸の地に勧請したと伝わる。その後、文明 15 年（1483）に地領・大野近江守によって再建された。昭和 57 年 (1982)『小田町の文化財』によると、現在の社殿は延宝 7 年（1679）に大野直倫が現在地に移転した当時のもの。境内には明治 41 年 (1908) に上川地区内の神社等が合祀された末社が建つ。

県指定天然記念物（昭和 34 年 (1959)）の世善桜は、移転前の太森神社が御獄地区にあった際、境内に植えられたもの。人々がこの桜に「良い世の中でありますように」との願いを込めて「世善桜」と名付け代々親しんできている。

2　関連する活動

(1) 小田地区における林業

①小田地区の林業

小田地区の林野は、東部を占める仁淀川流域の小田深山と、中・北部を占める小田川流域沿いからなる。前者が国有林であるのに対して、後者は民有林であり、小田地区の林野所有形態ははっきりと地域的に二分されている。

小田地区の林業は小田深山の林産資源の開発がその先駆をなし、藩政期以降明治期に至るまで、カエデ、カツラ、ブナなどの広葉樹、モミ、ツガなどの針葉樹が、トロッコや森林鉄道等で小田深山から搬出されていた。搬出された木材は大半が小田川沿いに運ばれており、それらが地元小田地区の明治 20 年 (1887) 築の都築酒店や大正期の旧土居家住宅、昭和に入ってからも昭和 11 年 (1936) に再建された中川三島神社や昭和 17 年 (1942) 築の旧二宮製材所事務所兼主屋、また小田川流域である大瀬地区の明治 33 年 (1900) 築のとぼしが森三島神社などにも使われている。民家や商家ではマツの大黒柱やケヤキの巨樹の一枚板など贅沢な意匠を見ることができる。

これらケヤキの巨樹の一枚板の床の間や建具、マツ材の大黒柱は、旧二宮製材所事務所兼主屋のような小田地区に限らず、大瀬地区の明智醸造主屋や内子地区の芳我家の主屋などにも見られ、大半がこの小田深山からのものと言われている。明治以降の建物で、製蠟や製紙、養蚕、林業など、産業で栄えた重伝建地区の家等の重厚で意匠の凝った建物に見られるのが特徴である。

また一方、小田川沿いの民有林は大正年間まで雑木林が多く、焼畑によるとうもろこしなどの自給作物や三椏、櫨などの換金作物栽培が盛んであった。また雑木は製炭原木として使われ、クヌギ炭や雑炭を生産し、内子・

一枚板のケヤキが使われた引き戸

手入れの行き届いた林

小田原木市場

大洲方面へ搬出していた。

昭和 59 年 (1984)『愛媛県史地誌 II（中予）』によると、人口造林が盛んに行われるようになったのは、昭和 25 年 (1950) 頃からで、その後、飛躍的に小田林業として発展していく。同 26 年 (1951)『村勢要覧（参川村、小田町村、田渡村）』によると、林野面積のうち人工林が 53%であったが、同 55 年 (1980) には 82%と大幅に増加している。また愛媛県下一といわれる久万地区の同 56 年 (1981) の素材生産量が 5.3 万㎥であるのに対して、小田地区は 5 万㎥で、ほぼ肩を並べるまでになった。しかし、戦後の植栽が大半であったため幼齢林が多く、当時木材としての蓄積は少なかった。

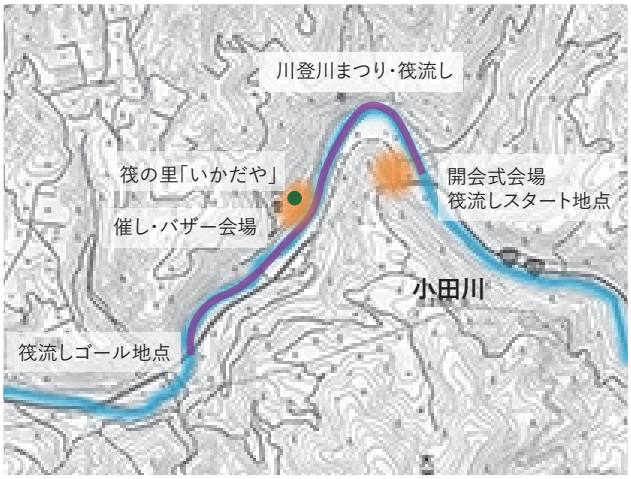
同 49 年 (1974) からは、当時の小田町森林組合（現在は内子町森林組合に統合）は毎年林業後継者を京都北山、奈良吉野方面へ 1 年間の研修に派遣し、生産技術等を習得させ、磨小丸太、床柱、桁材等の銘木生産を行っていた。

近年、林業は厳しい状況が続いていたが、技は受け継がれ、当時植えられた木が財産として蓄積されている。現在の内子町総面積の約 78%を森林が占め、そのうち民有林 18,840ha のうち小田地区が 7,960ha、約 42%を占める。小田地区は針葉樹でも圧倒的にスギが多く、大径木が育っている。現在、新たな仕組みのもと、山の再生、林業の再興を目指し、内子町森林組合が主となって「森林経営計画」を所有者と作成し整備等が進められている。同組合では、特に森林整備に関する事業は小田支所と、そこに隣接する原木市場が中心となって推進しており、山林の樹木伐採や間伐等を行う藤岡林業や森本等の素材生産者、製材等木材を扱う大瀬木材、藤井製材、森田材木店など地元事業者と連携して取り組んでいる。

■小田川流域における主な林業に関する建造物・活動等

上 _ 川登自治会主催の川まつり・筏流し。筏流しを体験できる
左 _ かつての筏流しを再開。いかだの組み方や長い筏の棹さばきを継承している

■現在の筏流しの範囲



②小田川と流通

内子町の林業においては、まちを東西に横断する小田川の存在が大きく、藩政期から木材の輸送路として林業を支えてきた。伐り出された木材は馬や牛、トロッコや森林鉄道で小田川まで運ばれ、それらを「筏師」が筏に組んで「筏流し」で大瀬、内子、五十崎を経て大洲・長浜まで運んでいた。

筏の大きさは長さ約 2 間（3.6m）の木材を末口を前にして幅 6 － 8 尺の大きさに組んだものを一棚と呼び、これを 12 － 16 棚連結したものを一流れまたは一先と呼んだ。小田川の筏はこの半分くらいであったとされ、本流の肱川に入ると徐々に多くの棚が連結された。筏の組み作業は、小田川においては「連中（れんちゅう）」と呼ばれる組で行われ、小田川筋には水元連中、大瀬連中、和田連中、内子連中の 4 つが存在していた。筏を組む組み口には筏堰（いかだぜき）が造られ、そこでいったん水をせき止めて組み、堰を開けて一気に流していた。現在も突合には堰が残っている。林業の最盛期には筏師は花形職業だった。

陸路の流通については、大正 12 年 (1923) に小田深山からの森林鉄道が敷設されてから大量に搬出されるようになった。その後、自動車運送の発達により森林鉄道は昭和 28 年 (1953) に役目を終え、同軌道には同 37 年 (1962) に林道が整備された。なお大正 9 年 (1920) に愛媛鉄道により内子線が開通してからは、内子駅からは鉄道によっても大洲・長浜港へ送られた。

これら交通網の発達により小田川の水運による輸送形態は徐々に見られなくなっていったものの、戦後の木材ブームもあって、筏流しは昭和 28 年 (1953) まで行われた。

その後、平成 5 年 (1993)、「筏師の里」といわれた大瀬川登地区で約 40 年ぶりに筏流しが再開された。きっかけは、地域住民が小田川の清流を守ろうと「川まつり・筏流し」を開催したことによる。小田川の象徴でもあった筏流しを、元筏師らが組み方や流し方、

■小田川から肱川河口の長浜までの経路図

昭和 6 年頃の内子駅

■愛媛県の製材工場（昭和 8 年愛媛県木材協会調べ）

種別／地区	工場数	創業年 明治41～	大正8～	昭和元～	昭和6－8	従業員（人）	原木消費（千石）
三島	3	1	-	1	1	14	28
新居郡	7	1	2	2	2	27	22
今治	13	3	6	4	-	89	38
松山	8	-	4	3	1	55	31
上浮穴郡	13	-	4	5	4	36	28
喜多郡	13	1	5	4	3	144	57
宇和島	10	1	2	4	3	42	29
合計	67	7	23	23	14	407	233

棹さばきなどの技術を伝授。以後毎年 4 月の第 4 日曜日に行っている。12 棚、長さ約 40m の筏を作り、蓑（みの）に菅笠（すげかさ）姿の筏師らが巧みな棹さばきを見せ、現在も地域住民の手でその技術が受け継がれている。

③製材と木材出荷

大正から昭和前期、大洲・長浜港は秋田の能代、和歌山の新宮とともに日本三大木材集散地として大盛況であったとされ、西日本の木材価格水準を支配していたといわれる。

またその頃から原木の製材加工が始まり、小田川流域には藤山、久保などの各製材工場が創業した。戦後、木材の需要が激増し、産地製材工場も相次いで創業・増設された。現在も創業を続ける大瀬木材は昭和 26 年 (1951)、大瀬地区に創業、森田材木店は旧内子駅側に昭和 44 年 (1970) 頃創業。当時の松本製材の建物を購入し、現在地で操業を続けている。

昭和 8 年 (1933) に国鉄となった内子駅も木材集散地として活気にあふれ、貨車ホームには木材が山積みになり、周辺には木材問屋

や木材商、日本通運や林産物検査院などの事業所が立ち並び賑わった。現在は出荷のルートや手段は変容したが、木材店などが当時の繁栄を今に伝えている。

(2) 山と人々の営み

①山の神火祭り

文政 6 年 (1823) にはじまったとされる山の神の火祭りは、小田・寺村地区の約 200 年近く続く山の神を祀る行事 (昭和 57 年 (1982) 町指定無形民俗文化財) である。寺村の林慶・新田・堂村・中通りの地元の区が組をつくり毎年その組ごとに「当番」が回ってきて「当番組」として世話をしている。その代表を「宿」と言い、連絡係を「フレカタ」と呼ぶ。この当番の記録である『当番帳』が文政 6 年 (1823) から始まっており、その頃からずっと続いている。

現在の「山の神火祭り」は昭和 51 年 (1976) から 8 月 15 日の開催となっているが、本来は旧暦の 7 月 20 日に行うもので、現在もこの日にも当番組が「六角山」へ登り石碑の前で神事を行っている。六角山でははじめに石碑周辺を清掃し、山の神に酒や肴を供えて蠟燭に「オヒカリ」を灯し (地元では蠟燭や松明などに点火したものを「オヒカリ」と呼ぶ)、太鼓と念仏鉦に合わせて「ナンマイダブツ・・・」と 2 組に分かれて交互に 108 回、豆などで数を数えながら念仏を唱える。日暮れ近くになると、六角山の真下の田に 108 灯のオヒカリを灯す。

8 月 15 日には「山の神火祭り」が盛大に行われている。まず六角山から巫女たちがオヒカリを運んでくる。そのオヒカリで、当番組が中心となって「山の神」の火文字などを描いたり田んぼの畦道に灯したりしている。その数は 4,000 灯にも及び幻想的な雰囲気に包まれる。

旧暦 7 月 20 日の六角山の神事

8 月 15 日、六角山からオヒカリを運ぶ

受け取ったオヒカリを灯していく

田んぼの畦道に灯されたオヒカリと火文字

②山に関する信仰

小田地区では山や林業に関する信仰が厚く、長く続いているものが多い。

小田・町村地区の愛宕山信仰は寛政4年(1792)『愛宕山の御祭礼帳』が残っており、旧暦の6月24日を祭日と定めてお祭りを行うことや、毎年の当番者の名前や経費などが記されている。現在も地区の氏神様の八坂神社の総代たちが中心となって継続している。お祭り前に愛宕山の清掃などを行い、当日はお供え物などを用意しお参りしている。

小田・寺村地区の愛宕山においても夏に清掃などを行ってお念仏を唱えている。こちらも『当番帳』が文政6年(1823)の記録から残っており（※山の神火祭りと同様)、長く続いている。

この他、総山祇神社と鬼ヶ臼観音では、山仕事の安全を祈願する山の神の祭祠「山神祭」が、起源は不明であるが、夏に向かう5月20日と伐木の時期に入る9月20日に行われている。これは小田深山をはじめとする国有林を対象とした祭祠で、現在は、小田地区と隣接する久万高原町で行われており、この総山祇神社では、その前日に愛媛森林管理署小田第一森林事務所によって草刈りなどの整備が行われ祀られている。翌日はそれぞれの現場でお神酒を供え、安全を祈って仕事にかかっている。

また木材を運んだ馬の安全を祈願する馬頭観音などの信仰が今も続いている。これらの管理や祭祠は地域の近隣住民が行っている。

③神社と巨樹・巨木に関する祭礼

小田地区の中でも小田深山の含まれる参川地区では、広瀬神社のイチイガシやケヤキ、中川三島神社のイチョウ、太森神社のサクラ等、神社に関係する祭礼と巨樹・巨木の保存に対する意識が高い。

広瀬神社境内には樹齢1,000年以上といわれるイチイガシ（県指定天然記念物、昭和25年(1950)）とケヤキ2本(同、同28年(1953))の巨樹がそびえる。広瀬神社は明治期、小田地区の郷社であり秋祭りなどの祭礼が長く続く。また相殿として恵比須神社が祀られており、地元の氏神としてだけでなく、11月20日には亥の子まつりが開催され、恵比須講や種子交換（地元民と高知等遠方の参拝者が自家で採れた作物の種子を持ち寄り交換する）も行われるなど広域的な信仰が見られる。昭和32年(1957)『館報おだまち』にも秋祭りや亥の子まつりについての掲載があり、当時から秋祭りや亥の子まつりには多くの人が集まり、境内のイチイガシやケヤキはシンボリックな存在として親しまれてきた。

中川三島神社は小田地区で最も古いお宮で、昭和57年(1982)の『小田町の文化財』によると和銅5年(712)に勧請された。境内にある乳出の大イチョウ（県指定天然記念物、昭和24年(1949)）は、勧請の際に植えられたとされ、名前のとおり、このイチョウの皮を煎じて飲むと母乳の出がよくなるといういわれがある。昭和60年(1985)『小田町誌』によると中川三島神社の神輿は室町中期から

小田・町村地区の
愛宕山御祭礼帳

火の神様、愛宕山の信仰（小田・寺村地区）

広瀬神社相殿の恵比須神社亥の子まつり

中川三島神社のイチョウ祭り

桃山時代のものである。この神輿は現在も秋祭りなどで渡御しており例祭が長く続いていることが分かる。今も秋祭りや相殿の竜王神社の竜王まつりなど祭礼の際には乳出の大イチョウもお祀りしている。また近年はこの乳出の大イチョウにちなんで中川イチョウ祭りを行い、郷土食の調査・研究の一環で銀杏を使ったお餅やおこわなどをつくって振る舞っている。

太森神社には享和 3 年 (1803) と銘のある太鼓が祭りで使われ続けており、信仰の歴史も長いことが分かる。延宝 7 年 (1679) に移転する前の同神社の境内（御獄地区）には、地域の人々が「良い世の中でありますように」と「世善桜」と名付け代々親しんでいる桜（県指定天然記念物（昭和 34 年 (1959)）があり、長く農作物の出来を占う神木とされてきた。現在の境内にも「世善桜」の挿し木苗を植えて育てるなど、当地区住民の信仰の対象や心の拠り所となっている。

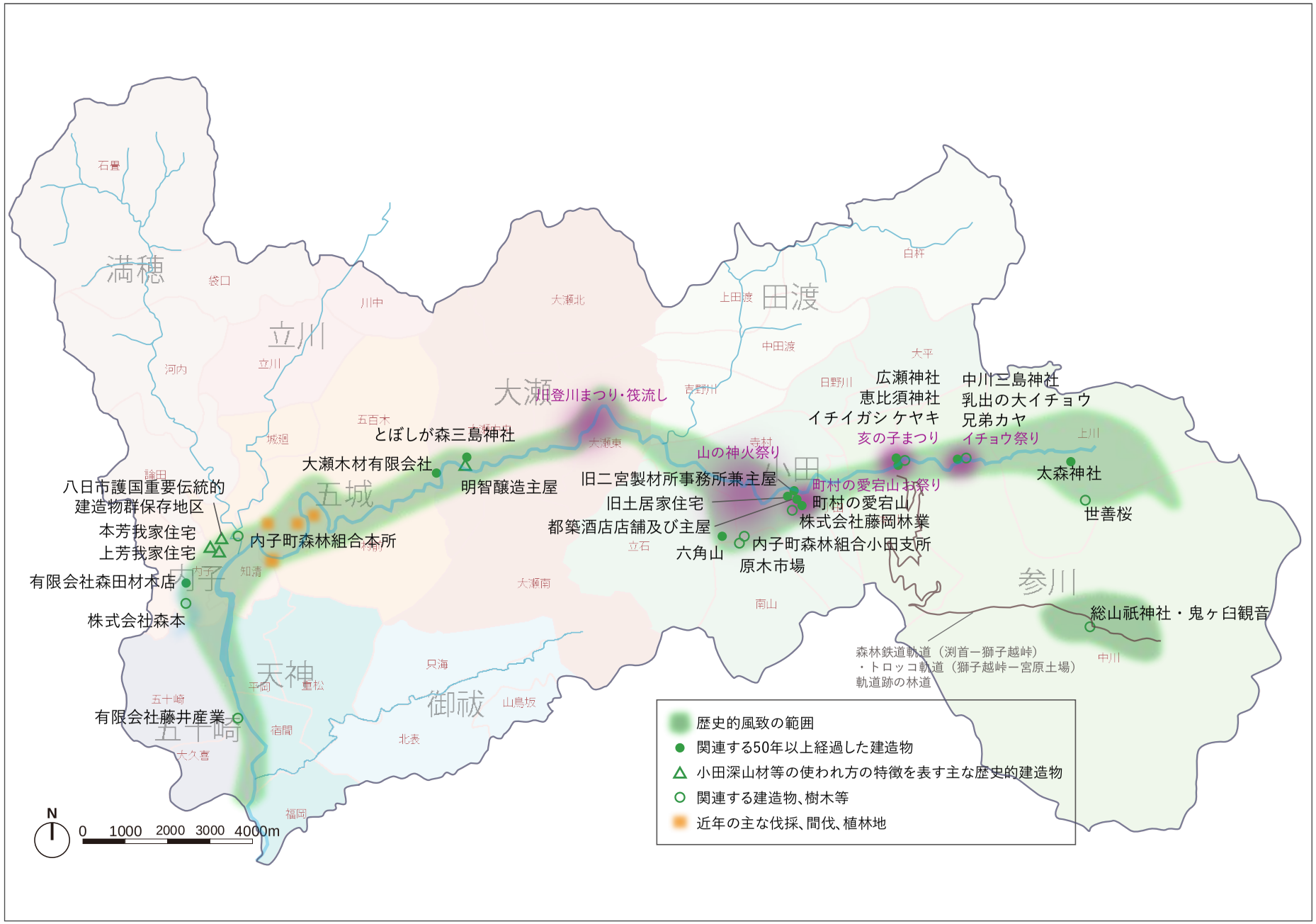
このように小田地区では巨樹巨木が身近な存在であり、神社での祭礼等をとおして大切に守られている。

□まとめ

内子町における林業は担い手の高齢化や後継者不足、価格低迷やこれらによる放置林の増加など課題は枚挙にいとまがない。しかし、半世紀ほど遡れば、地域を代表する生業の一つであり、さらに遡れば小田深山は藩を代表する良材の産地として評価されたほどであった。

今残る建物も、当時は当たり前のように地元産材が使われ、下流の内子や五十崎までも運ばれ、地域内循環が図られていた。中には産業で財を成し、小田の貴重な良材が使われた屋敷を建てた家も現代に多く残る。それは当時から小田地区にとって誇りであり、山は宝であった。ゆえに山や森、巨樹・巨木は長く心の拠り所にもなった。

これら小田地区をはじめとする小田川流域における林業に関する建造物とその営みは現代にも息づいており、またその背景にある山の神や巨樹・巨木に対する信仰心が小田地区の変わらない風景を残している。広域でありながらも小田川の流れに沿って小田地区、内子地区、五十崎地区を結ぶ貴重な風致である。


満穂
石畳
袋口
立川
河内
立川
川中
大瀬北
大瀬
五百木
城廻
大瀬東
大瀬南
田渡
上田渡
中田渡
白杵
大平
日野川
吉野川
寺村
上川
小田
立石
南山
内子
論田
知清
内子
五城
天神
平岡
重松
只海
御祓
山鳥坂
北表
五十崎
宿間
大久喜
福岡
参川
中川
登川まつり・筏流し
とぼしが森三島神社
大瀬木材有限会社
明智醸造主屋
八日市護国重要伝統的
建造物群保存地区
本芳我家住宅
上芳我家住宅
内子町森林組合本所
有限会社森田材木店
株式会社森本
有限会社藤井産業
山の神火祭り
旧二宮製材所事務所兼主屋
旧土居家住宅
都築酒店店舗及び主屋
六角山
内子町森林組合小田支所
原木市場
広瀬神社
恵比須神社
イチイガシ ケヤキ
亥の子まつり
中川三島神社
乳出の大イチョウ
兄弟カヤ
イチョウ祭り
町村の愛宕山お祭り
町村の愛宕山
株式会社藤岡林業
太森神社
世善桜
総山祇神社・鬼ヶ臼観音
森林鉄道軌道（渕首ー獅子越峠）
・トロッコ軌道（獅子越峠ー宮原土場）
軌道跡の林道
歴史的風致の範囲
関連する50年以上経過した建造物
小田深山材等の使われ方の特徴を表す主な歴史的建造物
関連する建造物、樹木等
近年の主な伐採、間伐、植林地
N
0 1000 2000 3000 4000m